

Title	阮籍の詩文テキストについて
Sub Title	A study of RuanJiji's texts
Author	阿部, 順子(Abe, Junko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2007
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.93, (2007. 12) ,p.82(141)- 107(116)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00930001-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

阮籍の詩文テキストについて

阿部 順子

漢魏六朝の詩人・文人の中で、阮籍（210-63）はその「詠懷」詩を以て名を知られている。しかし、阮籍の詩文集は、清朝が編纂した一大叢集『四庫全書』、そして現存する善本を影印した『四部叢刊』のどちらにも収録されていない。

先秦漢魏六朝詩の総集『詩紀』を輯校した明の馮惟訥は、阮籍「詠懷八十二首」の題下注で「阮嗣宗集、傳之既久、頗存僞闕。世之較録者、往往肆爲補綴、作者之旨、淆亂甚焉」と述べている。これこそが、阮籍が詩人として高い知名度を有するにも関わらず、その詩文集が『四庫全書』にも『四部叢刊』にも収められなかった理由であろう。

本稿は、阮籍の詩文に関する歴代の記録をたどり、更に現存する阮籍集の諸本を比較対照することによって、阮籍集の原書はどのようなものだったか、それはいつ散佚したのか、また現存する阮籍集の特徴を略述し、漢魏六朝人の詩文集が伝存あるいは散佚していく過程の一例を見出そうとするものである。

一．歴代書目における阮籍集の記録と現存する主要版本

1. 諸書にみえる阮籍作品の記録

史書に阮籍が登場するのは、西晋の陳壽『三國志』¹ 卷二十一魏書王粲傳である。だが陳壽の阮籍に関する記述は極めて短く、阮籍の詩文に関する情報は何ら得られない。

東晋に入ると多くの西晋史が編纂された。それらは後にすべて散佚したが、諸書に引用されている佚文の中には、阮籍に関する記載が非常に多く残っている。これは西晋から東晋にかけて、阮籍が西晋史を記述する上で欠かせない重要人物になっていったことを窺わせる²。

一方、文人としての阮籍、また阮籍の詩文についてはどうだったか。齊の臧榮緒は『晉書』を編纂した。李善単注本『文選』³ 卷二十一・詩乙・詠史・顔延年「五君詠・阮步兵」李善注所引『臧榮緒晉書』に「(阮籍)善屬文論、初不苦思、率爾便成。作五言詩詠懷八十餘篇、爲世所重」とある。これが今の時点で確認できる限りの、阮籍が五言詩「詠懷」を作ったと明言している最も早い記録である。

梁に編纂された『文選』には阮籍の「詠懷」十七首(卷二十三・詩丙・詠懷)と「爲鄭冲勸晉王牋」(卷四十・牋)が収録されており、『文選』所収「詠懷」李善注には顔延年と沈約による「詠懷」詩注が引用されている。また、すべてが「詠懷」詩を指しての論評とは限らないが、梁の鍾嶸『詩品』と劉勰『文心雕龍』にも阮籍の詩についての論評が載っている⁴。よって、阮籍の詩文も齊梁において既に高い評価を受けていたことが分かる。

これらのことから、とりわけ齊梁のあたりから、阮籍は歴史上の人物として高い知名度を有していたと同時に、高い文名をも獲得していたことが知られるのである。

唐に至って、房玄齡・李延壽らが『晉書』を編纂した。これは臧榮緒の『晉書』を主な底本として、更に他の晋史や晋代の文集を補助材料として編まれたものであった⁵。

臧榮緒『晉書』阮籍傳の佚文と房玄齡・李延壽等撰『晉書』卷四十九阮籍傳の記述は多く一致する。よって、臧榮緒撰『晉書』阮籍傳の内容は、房玄齡・李延壽等撰『晉書』阮籍傳と大きな違いはないと思われる。房玄齡・李延壽等撰『晉書』阮籍傳には阮籍の詩文に関する言及がいくつかある。

・會帝讓九錫、公卿將勸進、使籍爲其辭、籍沈醉忘作。臨詣府使取之、

見籍方據案醉眠。使者以告、籍便書案、使寫之、無所改竄、辭甚清壯、爲時所重。

- ・登武牢山、望京邑而嘆、于是賦豪傑詩。
- ・籍能屬文、初不留意、作詠懷詩八十餘篇、爲世所重。
- ・著達莊論、敘無爲之貴。
- ・著大人先生傳。

触れられているのは『文選』に収録されている「爲鄭冲勸晉王牋」、「詠懷詩八十餘篇」、現在もその本文が伝わっている「達莊論」と「大人先生傳」である。ただ、「登武牢山、望京邑而嘆、于是賦豪傑詩」の「豪傑詩」は、少なくとも篇名の上では現存しない。

2. 歴代書目における阮籍集の記録

阮籍集を著録している、現存する最も古い書目は、唐の顯慶元年（656）に成った『隋書』⁶ 經籍志であり、集部別集類に「魏歩兵校尉阮籍集十卷 梁十三卷録一卷」と記されている。阮籍集は梁には十三巻であったのが、隋志が編纂された当時においては十巻に減っていた。収録作品の数に変わりはなく、ただ巻数だけが減ったにすぎないのか、それともこのときすでに阮籍集の原書に崩れが生じていたのか、現在では知るよしもない。

また、889～98年ごろに成った藤原佐世撰『日本國見在書目録』⁷には、「阮嗣宗集五卷」、更に「阮歩兵集十巻」という書名がみえる。ここで注目すべきは、阮籍集に十巻本と五巻本の二種類が存在していたという点であろう。

それを裏付けるように、後唐の開運二年（945）に成った劉昫等撰『舊唐書』⁸ 經籍志丁部集録別集類には、「阮籍集五巻」という記載があり、北宋の嘉祐五年（1060）に成った歐陽修等撰『新唐書』⁹ 藝文志別集類にも「阮籍集五巻」と記されている。

北宋の慶曆四年（1041）に成った王堯臣、歐陽修等撰『崇文總目』¹⁰には「阮歩兵集十巻 阮籍撰」とあり、唐末から北宋において、十巻本と五

卷本の阮籍集が存在していたのは確かであろう。

次の南宋にあっても、状況は基本的に変わらなかった。晁公武『郡齋讀書志』¹¹ 卷十七・別集類上に「阮籍集十卷」の記録があり、陳振孫『直齋書錄解題』¹² 卷十六・別集類上にも「阮步兵集十卷」と記されている。

そして『直齋書錄解題』卷十九・詩集類上には更に「阮步兵集四卷」が著録されており、陳振孫はこの四卷本阮籍集について、「魏步兵校尉陳留阮籍嗣宗撰。其題皆曰詠懷。首卷四言十三篇、餘皆五言八十篇、通爲九十三篇。文選所収十七篇而已」と詳細な提要を書き残している。

前述したように、唐末から北宋にかけて、阮籍集には十卷本と五卷本の二種類が存在した。このうち五卷本は、陳振孫が所蔵していた、「詠懷」詩のみを収録するという「阮步兵集四卷」と巻数が近似しており、ひょっとしたら五卷本阮籍集も阮籍の詩のみを収録していたのかもしれない。実際、六朝人の詩文集から詩のみを抜き出し、「詩集」として刊行した例は他にもある¹³。

この晁公武『郡齋讀書志』と陳振孫『直齋書錄解題』の記録によって、南宋には十卷本と四卷本の阮籍集があったのは確かである。

3. 阮籍集の主要版本と収録作品の次序

宋元以前の阮籍集の鈔本ないし版本は現存しない。現存する阮籍集はすべて明代以降の版本であり、以下は筆者が調べた阮籍集の主要版本である。

- ・『阮嗣宗集』三卷 明嘉靖二十二年（1543）薛應旂序刊『六朝詩集』所収本、中國國家圖書館蔵。以下、薛本と略す。
- ・『阮嗣宗集』二卷 明嘉靖二十二年（1543）范欽・陳德文序刊本、中國國家圖書館蔵。以下、范本と略す。
- ・馮惟訥輯『古詩紀』 明嘉靖三十九年（1560）甄敬序刊本、京都大学文学部所蔵本影印、汲古書院刊。以下、『詩紀』と略す。
- ・『阮嗣宗集』二卷 明萬曆天啓間（1573 ～ 1627）汪士賢校本、内閣

文庫藏。以下、汪本と略す。

- ・『阮嗣宗集』二卷 明萬曆天啓間（1573 ～ 1627）程榮校本、内閣文庫藏。以下、程本と略す。
- ・『阮嗣宗集』四卷 明天啓三年（1623）及朴序刊本、中國國家圖書館藏。以下、及本と略す。
- ・『阮步兵集五卷附録一卷』 明天啓崇禎間（1621 ～ 44）張燮輯『七十二家集』所収本、内閣文庫藏。以下、七十二家集本と略す。
- ・『阮步兵集』一卷 明張溥輯『漢魏六朝百三名家集』所収本、清刊本影印、臺灣新興書局刊。以下、百三家集本と略す。

参考のため、以上八種の版本に収録される作品とその次序の比較表を下に挙げる。

阮籍集収録作品及び次序比較表

※番号は五言詠懷、四言詠懷、賦・文章ごとに付した
※同一の番号は一首として収録されていることを示す。

篇名	薛本	范本	詩紀	汪本	程本	及本	七十二	百三
	卷一	卷上		卷上	卷上	卷一		
東平賦	1	1	なし	1	1	1	1	1
首陽山賦	2	2	なし	2	2	2	3	3
元父賦	3	6	なし	6	6	3	2	2
鳩賦	4	3	なし	3	3	4	6	6
清思賦	5	5	なし	5	5	5	4	4
獼猴賦	6	4	なし	4	4	6	5	5
	卷二	卷下		卷下	卷下	卷二		
放心懷寸陰	1	24	21	24	24	21	21	21
譽鳩飛桑榆	1	26	46	26	26	46	46	46
登高臨四野	2	17	13	17	17	13	13	13
夜中不能寐	3	1	1	1	1	1	1	1
誰言萬事艱	4	2	36	2	2	36	36	36
嘉事在今辰	5	3	37	3	3	37	37	37
生命辰安在	6	27	47	27	27	47	47	47

鳴鳩嬉庭樹	6	27	48	27	27	48	48	48
步遊三衢旁	7	28	49	28	28	49	49	49
清露爲凝霜	8	29	50	29	29	50	50	50
井心失恩澤	9	30	51	30	30	51	51	51
十日出陽谷	10	31	52	31	31	52	52	52
東南有射山	11	32	23	32	32	23	23	23
湛湛長江水	12	13	11	13	13	11	11	11
自然有成理	13	33	53	33	33	53	53	53
二妃遊江濱	14	4	2	4	4	2	2	2
嘉樹下成蹊	15	5	3	5	5	3	3	3
昔日繁華子	16	16	12	16	16	12	12	12
殷憂令志結	17	34	24	34	34	24	24	24
夸談快憤懣	18	35	54	35	35	54	54	54
人言願延年	18	36	55	36	36	55	55	55
拔劍臨白刃	19	37	25	37	37	25	25	25
貴賤在天命	19	38	56	38	38	56	56	56
開秋兆涼氣	20	18	14	18	18	14	14	14
驚風振四野	21	39	57	39	39	57	57	57
朝登洪坡顛	22	40	26	40	40	26	26	26
危冠切浮雲	23	41	58	41	41	58	58	58
周鄭天下交	24	42	27	42	42	27	27	27
河上有丈人	25	43	59	43	43	59	59	59
儒者通六藝	26	44	60	44	44	60	60	60
卷三								
幽蘭不可佩	27	なし	45	82	82	45	45	45
北里多奇舞	28	12	10	12	12	10	10	10
獨坐空堂上	29	45	17	45	45	17	17	17
少年學擊劍	30	46	61	46	46	61	61	61
炎火延萬里	31	47	38	47	47	38	38	38
平晝整衣冠	32	48	62	48	48	62	62	62
多慮令志散	33	49	63	49	49	63	63	63
朝出上東門	34	50	64	50	50	64	64	64
王子十五年	35	51	65	51	51	65	65	65
壯士何慷慨	36	52	39	52	52	39	39	39
寒門不可出	37	53	66	53	53	66	66	66
洪生賢制度	38	54	67	54	54	67	67	67

平生少年時	39	7	5	7	7	5	5	5
昔聞東陵瓜	40	8	6	8	8	6	6	6
步出上東門	41	11	9	11	11	9	9	9
昔年十四五	42	19	15	19	19	15	15	15
徘徊蓮池上	43	20	16	20	20	16	16	16
儔物終始殊	43	21	44	21	21	44	44	44
若花耀西海	44	55	28	55	55	28	28	28
西方有美人	45	15	19	15	15	19	19	19
北臨乾昧谿	46	56	68	56	56	68	68	68
天馬出西北	47	6	4	6	6	4	4	4
又								
昔余遊大梁	48	57	29	57	57	29	29	29
驅車出門去	49	58	30	58	58	30	30	30
駕言發魏都	50	59	31	59	59	31	31	31
人知結交易	51	60	69	60	60	69	69	69
夏后乘靈輿	52	25	22	25	25	22	22	22
朝陽不再盛	53	61	32	61	61	32	32	32
一日復一夕	54	62	33	62	62	33	33	33
一日復一朝	55	63	34	63	63	34	34	34
有悲則有情	56	64	70	64	64	70	70	70
木槿榮丘墓	57	65	71	65	65	71	71	71
脩塗馳軒車	58	66	72	66	66	72	72	72
橫術有奇士	59	67	73	67	67	73	73	73
渾元生兩儀	60	68	40	68	68	40	40	40
天網彌四野	61	69	41	69	69	41	41	41
王業須良補	62	70	42	70	70	42	42	42
世務何繽紛	63	71	35	71	71	35	35	35
猗歟上世士	64	72	74	72	72	74	74	74
炎暑惟茲夏	65	9	7	9	9	7	7	7
梁東有芳草	66	73	75	73	73	75	75	75
秋駕安可學	67	74	76	74	74	76	76	76
楊朱泣岐路	68	23	20	23	23	20	20	20
咄嗟行至老	69	75	77	75	75	77	77	77
昔有神仙士	70	76	78	76	76	78	78	78
懸車在西南	71	14	18	14	14	18	18	18
灼灼西隕日	72	10	8	10	10	8	8	8
林中有奇鳥	73	77	79	77	77	79	79	79

出門望佳人	74	78	80	78	78	80	80	80
昔有神仙者	75	79	81	79	79	81	81	81
鴻鵠相隨飛	76	80	43	80	80	43	43	82
墓前焚焚者	77	81	82	81	81	82	82	83
青鳥海上遊	なし	22	なし	22	22	なし	なし	なし
月明星稀	なし	1	2	2	2	2	2	2
天地烟燼	なし	2	1	1	1	1	1	1
清風肅肅	なし	なし	3	3	3	3	3	3
通易論	なし	卷上	なし	卷上	卷上	卷三		
莊論	なし	7	なし	7	7	7	15	13
樂論	なし	8	なし	8	8	8	16	14
	なし	9	なし	9	9	9	14	12
						卷四		
奏記太尉蔣濟	なし	10	なし	10	10	12	8	8
答伏羲書	なし	11	なし	11	11	13	11	11
大人先生傳	なし	12	なし	12	12	10	18	16
爲鄭沖勸晉王賤	なし	13	なし	13	13	11	7	7
又	なし	なし	なし	なし	なし	なし	9	9
與晉王薦盧播書	なし	なし	なし	なし	なし	なし	10	10
伏羲與阮籍書	なし	なし	なし	なし	なし	なし	12	なし
通老論	なし	なし	なし	なし	なし	なし	17	15
老子贊	なし	なし	なし	なし	なし	なし	19	17
孔子誅	なし	なし	なし	なし	なし	なし	20	18
搏赤猿帖	なし	なし	なし	なし	なし	なし	13	20
弔某公文	なし	なし	なし	なし	なし	なし	21	19
採薪者歌	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1
大人先生歌(天地)	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	2
大人先生歌(陽和)	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし

二.『六朝詩集』本『阮嗣宗集』

1.『六朝詩集』について

薛應旗輯『六朝詩集』は魏晉南北朝人二十四家の詩集からなる叢集であり、『阮嗣宗集』三巻が収録されている。序、目録などは付されていない。第一冊『梁武帝集』の冒頭に薛應旗による嘉靖癸卯（1543年）付けの総序が掲載されているものの、各詩集の底本については何も言及されていない。総序の末行には小字で「毘陵陳奎刊」と刻されており、常州で刊行されたことが分かる。

國家圖書館所蔵『六朝詩集』第一冊には鄭振鐸の手跋¹⁴があり、その中で鄭振鐸は「明人所刻漢、魏、六朝人集、當無早於此刻者」と述べている。更に鄭振鐸は「方治漢、魏、六朝人詩、得此明刻六朝人集中的白眉、喜可知也」と『六朝詩集』を高く評価しており、その底本について「頗疑是從宋書棚本覆刻」と推測する。その根拠を鄭振鐸は記していないが、少なくとも『六朝詩集』本『阮嗣宗集』三巻には他本と大きく異なる特徴があり、それは鄭振鐸が述べた如く、底本の由来の古さを窺わせる。

2.「五言詩」について

それは「詠懷」詩において最も顕著である。まず、薛本は「詠懷」という篇名ではなく、「五言詩」という篇名を用いている。次に、薛本は、「幾首」のように「五言詩」の総数を冒頭で記しておらず、また各首の前に「其幾」といった番号も付していない。各詩の切れ目は改行によってしか区別できない。

よって、他本ではそれぞれ独立した一首とされている複数の詩が、途中で換韻されているにも関わらず、改行されていないために、見た目は一首の詩のようになっている例がいくつも見受けられる。

『文選』に収録されている阮籍「詠懷」十七首は、短いもので八句、長くても十六句からなり、韻字はすべて一韻である。従って、薛本が途中で換韻のある詩を一首としているのは誤りである可能性が高い。

しかし、他本では遠く離れた位置にある二首を一首としている例、また他本では隣り合う二首の詩とされており、しかも押韻の異なる詩を一首としている例があることは、逆に薛本『阮嗣宗集』が、底本としたテキストの原貌をそのまま保存していることを示していると思われる。

また、一般に明人が漢魏六朝人の詩文集を刊行する場合は、底本に手を加えるのが当たり前である。たとえば巻次、次序、篇名を変更したり、底本に収録されていない作品、佚句、佚文を増補したり、前人の序や論評など、その詩人に関連する文章を附録として加えたりする¹⁵。それなのに、薛本には四言「詠懷」詩の佚句や佚文がまったく収録されていない。

更に、「五言詩」の次序は他本のいずれとも異なる。薛本「五言詩」第一首は「放心懷寸陰」詩と「譽鳩飛桑榆」詩が合わさったものである。馮惟訥は『詩紀』卷十九・魏九所収阮籍「詠懷詩八十二首」第二十一首「於心懷寸陰」詩の本文末に、「京師曹氏家藏阮步兵詩一卷、唐人所書、與世所傳多異。其一篇云、放心懷寸陰、羲和將欲冥。揮袂撫長劍、仰觀浮雲行。雲間有立鵠、抗首揚哀聲。一飛冲青天、疆世不再鳴。安與鶉鷄徒、翩翩戲中庭。孔宗翰亦有本、與此多同」と記している。

薛本「五言詩」の第一首はまさに「放心懷寸陰」詩であり、馮惟訥が見たという唐人の書になる「阮步兵詩」と第一首の次序が一致する。字句に関しては、第一句が「放心懷寸陰」となっているのみで、それ以外は『詩紀』所収文とほぼ同じである。

しかし、薛本が「詠懷」詩をただ「五言詩」としていること、次序が他本と大きく異なること、別個の詩であると思われる二首の詩を一首としていること、四言「詠懷」詩が収録されていないこと、そして特に第一首の次序が馮惟訥の見た「唐人所書」の「阮步兵詩」と同じであることによって、薛本所収「五言詩」の底本の由来は古いと考えられ、これは鄭振鐸が『六朝詩集』の底本を「頗疑是從宋書棚本覆刻」と判断した考えと合致する。

薛本『阮嗣宗集』三卷の「五言詩」の底本は由来が古く、他本の底本とは一線を画すると推測される。更に、薛本の「五言詩」には妙な点がある。

卷二と卷三の冒頭にはそれぞれ「五言詩」という篇名が刻されている。ところが、卷三の途中で唐突に「又」という篇名が出てくるのである。

薛本の「五言詩」と次に紹介する范欽・陳徳文刊『阮嗣宗集』（范本）所収「詠懷」詩とは、途中までは次序が大きく異なるが、薛本卷三の途中でいきなり「又」という篇名の下に収録されている、薛本第四十八首、范本第五十七首「昔余遊大梁」以下の詩については、薛本と范本の次序はほぼ同じである。

従って、薛本と范本の底本はまったく同一であるとは考えられないが、それぞれの底本が本来は同じ系統に属するものであったと思われる。薛本卷三「又」以下の詩の次序が范本とほぼ一致することは、「又」以下の詩が後に加えられたこと、すなわち薛本と范本の底本が、元をたどれば断簡の寄せ集めであった名残を示しているのかもしれない。

薛本卷一に収録される賦と卷二、三に収録される「五言詩」の間には一種の乖離がある。前述のとおり、「五言詩」にはほとんど手が増えられておらず、注は一箇所のみである。その一方で、賦六篇には実に細かく校字注が施されている。これは、薛應旂が諸賦と「五言詩」の本文を別々の本から持ってきたか、或いは薛本の底本自体が一種の寄せ集めであったことを窺わせる。

『六朝詩集』本『阮嗣宗集』三巻の特に「五言詩」については、次序や字句の異同、そしてそれらの異同と内容との間に何らかの関係があるかどうかを中心に、その本文を研究し考察する価値は充分にあると考えられる。

三．范欽・陳徳文刊『阮嗣宗集』系統の阮籍集

1. 范欽、陳徳文刊『阮嗣宗集』

『六朝詩集』本と並んで、現存する最も古い阮籍の詩文集は、明嘉靖二十二年（1543）に刊刻されたと思われる『阮嗣宗集』二巻である。巻上下の両巻からなり、巻上には賦と文章を、巻下には「詠懷」詩を収める。

冒頭に嘉靖二十二年付けの陳徳文の序があり、「大梁舊刻籍詩南來、少

傅郡伯鄆范子、取而刻之宜春」というから、范本の底本は、阮籍の「詠懷」詩にもその名がみえる大梁、つまり開封で刊刻された版本だったらしい。それを宜春（現江西省吉安）に赴任していた范欽が翻刻したのである。

まず文章についていえば、范本に収められる賦六篇、文章七篇は、後に刊刻された阮籍集と収録作品に基本的には違いがない。特に文章七篇は、多くが『晉書』阮籍傳の中で言及されている作品、また『文選』にある作品ばかりである。

また、賦六篇はともかく、文章が七篇しかないというのは、范本の底本である「大梁の舊刻」もすでに残本であった可能性が高い。大体、南宋には十巻の阮籍集が存在したのだから、それが二巻に収まってしまうというのは、南宋から明の間に、完善な阮籍集はほぼ散佚してしまったことを示している。

巻下に収められる「詠懷詩八十一首」の次序も他本とは大いに異なっている。但し、前述したとおり、薛本巻三の「又」という篇名の下に収録される「昔余遊大梁」以下の詩の次序と、范本所収の「詠懷」詩の次序はほぼ一致する。

次序の他にも、薛本は『詩紀』が第四十七首、第四十八首としている「生命辰安在」詩と「鵑（鳴）鳩嬉庭樹」詩を一首として扱っているが、范本も同様に一首として扱って「其二十七」とし、更に「本集鵑鳩下別爲一首」という題下注を付している。

更に薛本と范本の「人言願延年」詩の字句はほぼ同一であり、更には本文末の校字注まで同じであって、『詩紀』系統の「詠懷」詩の本文とは異なっている¹⁶。

この他にも、薛本と范本で脱句が一致するという例がある。薛本「五言詩」第一首「鸞鳩飛桑榆」詩と范本第二十六首「鸞鳩飛桑榆」詩では、「羽翼不相宜」句がともに脱落している¹⁷。

ついでにいえば、『詩紀』所収五言「詠懷」詩第二十一首「於心懷寸陰」末に、馮惟訥が注記していた唐人の書になる「阮步兵詩一卷」の「其一篇」第一句は「放心懷寸陰」であった。范本所収「詠懷八十一首」其二十四の

第一句も「放心懷寸陰」となっている。

従って、「詠懷」詩においては、おそらく范本の底本である「大梁舊刻」も薛本と同じく、元来は同じ古い系統に属する本ではないかと思われるのである。

また、范本所収「詠懷」詩の大きな特徴は、『詩紀』所収五言「詠懷」詩第四十五首「幽蘭不可佩」詩がなく、「青鳥海上遊」詩が第二十二首として収められていることである。「青鳥海上遊」詩の題下注には「本集無此首、而有『幽蘭不可佩』一首」と記されている。

この「青鳥海上遊」詩は、実は阮籍の作ではない。江淹「雜體三十首」の「阮步兵詠懷」詩（『江文通集』卷四、『文選』卷三十一・詩庚・雜擬下所収）である。篇名が紛らわしいので誤って採録されたのだろう。薛本にはこの「青鳥海上遊」詩は収録されていないので、これは薛本と范本の底本の源流に相当する本が枝分かれした後に生じた錯誤であると思われる。

范本はまた「詠懷」と題して四言詩二首を載せる。題下注に「初學記有此篇、籍集不載」とある。増補されているのは「月明」と「天地」の二首であるが、『詩紀』所収の同詩と比べると欠句や異文がある¹⁸。

范本の本文は、詩文ともに他本と比べると異字異文が多く、そして特に賦と文章には校字注が細かく施されている。もしこれが范欽や陳德文の施したものであるなら、実に熱心に校勘作業を行なったといえる。しかし、全体的には誤字、脱字、脱句、脱文が多く、緻密な校勘を行っている割には、肝心の本文のチェックが疎漏であるという印象を免れない。

その典型的な例の一つ挙げる。「樂論」では「夔曰、於予擊石拊石」の後ろ、「百獸率舞」から「故擊石拊石」までの文が脱落している。理由はおそらく、「故擊石拊石」の後に再び「百獸率舞」という句があるからで、見た目には「擊石拊石百獸率舞」と同じ文が二回出てくるために、一回目の「擊石拊石」の後ろに、誤って二回目の「百獸率舞」を繋げてしまったのである。

范本のまた大きな特徴は、校字注に加えて案語が多いということである。そのほとんどは阮籍の伝記と作品の内容を照合して論評するタイプのもの

である。たとえば巻上「爲鄭冲勸晉王賡」本文末に注の形で「籍所草牋如此、固存魏倦倦之忠也。其亦異乎荀文若（荀彧）矣」と評し、また「通易論」本文末では「籍之通易、京房管輅有餘媿矣。漢儒訓詁、寧無陋乎。今之談易、迺遺籍何邪。貴耳賤目、世固比比爾也」と褒めたたえている。

巻下の「詠懷八十一首」ではこうした評語が殊更に多い。「詠懷詩八十一首」には「述懷八十一篇者、豈數極陽九而作邪。意微旨遠、見于命題、志士發憤之所爲也。讀籍詩者、其知憂患乎」という題下注があり、以下の多くの詩についても同じ調子であって、たとえば第五十二首「壯士何慷慨」末に小字で「衰魏之世、安得有壯士哉。宜無以繫嗣宗之思也」と注している。

2. 「汪士賢」校『阮嗣宗集』と「程榮」校『阮嗣宗集』

汪士賢校『阮嗣宗集』二巻、また程榮校『阮嗣宗集』二巻は、いずれも二十二～二十三家の詩文集からなる叢集中に収録されている。汪本の場合は明万曆十一年（1583）序刊『漢魏諸名家集』¹⁹等に収められ、程本は『漢魏六朝文』²⁰、『六朝文集』²¹、『漢魏六朝諸家文集』²²等に収録されている。

どちらが先なのかは判然としないが、汪本と程本とは翻刻の關係にあり、収録作品どころか、版式からしてすべて一致する。ただ巻頭の題署が「明新安汪士賢校」になっているか、「明新安程榮校」になっているかの違いだけである。ただし、本によっては、本文に欠落はないが、冒頭にあるはずの『晉書』阮籍傳や目録がないものがある。また本文についても、字が異なっていたり、補修が入っている箇所があったりする。しかし、いずれも一文字レベルの小さな違いで、基本的には文字どおり底本を敷き写しにして翻刻したものである。

筆者が見た汪本・程本の中で、最も完善と思われるのは万曆十一年（1583）序刊『漢魏諸名家集』所収汪士賢校『阮嗣宗集』二巻である。まず范本に掲載されている陳徳文の嘉靖癸卯（1543 年）の序があり、次に『晉書』阮籍傳を載せ、その次が目録となっている。

陳徳文の序を載せている時点ですでに察しはつくが、汪本・程本は范本を底本としている。范本と同じく上下両巻からなり、巻上、巻下に収録する作品とその次序もみな同じである。本文は范本とほぼ一致し、范本にある案語や注もすべてそのまま掲載している。

范本巻上「樂論」には前述のように大きな脱文があるが、汪本・程本もそれを踏襲している。また、范本と同様、「生命辰安在」詩と「鳴鳩嬉庭樹」詩を一首として扱っている。実は江淹の作である「青鳥海上遊」詩もそのまま収録する。

ただ、まったく范本と同じかというところでもなく、まず五言「詠懷」詩の最後に、范本が収めていない「幽蘭不可佩」詩を増補して「其八十二」としている。また范本の四言「詠懷」詩は「月明」と「天地」の二首のみで、しかも類書から増補した異文・欠文の多い文であったが、汪本・程本はそれを差し替えて、『詩紀』と同じ文の「天地」、「月明」、「清風」の三首を掲載している。

汪本と程本は、前に挙げたような、名前は様々に異なるが実は同じ本の翻刻である多くの叢集の中の一冊として広く流通したようである。汪本と程本は范本をほぼ忠実に翻刻したものであるのもので、汪本と程本が大量に出回ったことは、同時に范本のテキストが広く流通したということでもあった。

しかし、汪本と程本の版本は多く現存しているものの、「汪士賢刻本不精、字多訛舛、無甚足取」²³と評価は芳しくない。

四、『詩紀』所収『詠懷』詩・及朴刊『阮嗣宗集』系統の阮籍集

1. 『詩紀』所収『詠懷』詩

馮惟訥は先秦から隋までの詩を収録した総集『詩紀（古詩紀）』を編集した。その現存する最も古い刊本は、明嘉靖庚申（1560年）甄敬序刊本である。阮籍の詩は卷十九・魏九に収められ、収録作品はまず四言詠懷詩三首、次に五言詠懷詩八十二首、そして「歌二首」と題して、阮籍の「大人先生傳」にみえる「采薪者歌（「日没不周西」）」と「大人先生歌（「天地

解兮)』である。

『詩紀』所収阮籍詩の特徴は、まず四言詠懷詩の「天地」、「月明」、「清風」三首を完善と思われる形で掲載していることである。范本所収の四言詠懷詩は、『初學記』（実は『藝文類聚』）から増補した「月明」と「天地」の二首のみである。范本所収四言詠懷詩と『詩紀』所収四言詠懷詩を比べると、范本所収「天地」詩には欠句があり、また范本所収「月明」詩の本文は『詩紀』所収文と大いに異なる。

馮惟訥は諸書を比較参照して緻密な校勘作業を行った。「詩紀凡例」には「詩數見而句字不同者、參校其義稍長者爲正文、餘分註其下云『一作某』、或『某書作某』」、また「詠懷八十二首」題下注にも「今以諸本參校、其義稍優者爲正文、互異者分註於下」と記されている。「引用諸書」の中には『阮步兵集』と『六朝詩集』の名がみえる。この『阮步兵集』については、卷数なども記されていないので、どういう本だったのかは分からない。が、馮惟訥は阮籍の詩に関しては、主にこの『阮步兵集』と『六朝詩集』に依拠し、更に諸書における引用と比較して参考にしたであろうことが察せられる。

実際、詠懷詩には「一作某」、「五臣作某」、「集一作某」、「集作某」、「外編作某」、「初學作某」、「今本作某」、「拾遺作某」という校字注の他にも、「漢魏詩集合前爲一首」のように収録形式の違いを記した注、また「從藝文定正」と本文を他本に依拠して訂正したことを示す注がある。

既に薛本の項で引用したが、馮惟訥が五言詠懷詩について記している最も興味深い注は、第二十一首「於心懷寸陰」詩の末にある「京師曹氏家藏阮步兵詩一卷、唐人所書、與世所傳多異」云々の注である。

これによると、馮惟訥は唐人の書になる「阮步兵詩一卷」をも目にしていたことになる。ただし、この第二十一首に関する注記以外には、馮惟訥が唐人書「阮步兵詩一卷」を用いて八十二首すべてを校勘した痕跡、たとえば「唐本作某」といった注はまったくみえない。従って、馮惟訥が八十二首全編にわたって唐人書「阮步兵詩一卷」を参考したとは考えにくく、馮惟訥がみた唐人書「阮步兵詩一卷」の全部の次序や本文は、もはや知る

よしもない。

また、馮惟訥が「引用諸書」に挙げた『阮步兵集』についても、八十二首の五言詠懷詩、三首の四言詠懷詩、二首の歌を収録していたらしいこと以外は何も分からない。ただ、馮惟訥は、もしくは馮惟訥が依拠した「阮步兵集」は、薛本や范本が一首の詩として扱った「生命辰安在」詩と「鳴鳩嬉庭樹」詩を二首とみなし、それぞれ第四十七首、第四十八首として配列している。更に、范本が収録していた「青鳥海上遊」詩は収めていない。

五言詠懷詩八十二首の次序も范本とはまったく異なるが、『詩紀』における五言「詠懷」詩の次序は後世において一種の定番となり、それは逢欽立が『詩紀』を基に『先秦漢魏晉南北朝詩』を輯校したことによって、より確固としたものになった。

2. 及朴刻『阮嗣宗集』

及朴刻『阮嗣宗集』四卷は、冒頭に天啓三年（1623）付けの靳於中の序文、続いて同じく天啓癸亥（三年）付けの及朴の序文がある。靳於中は序文の中で「天啓壬戌、河間及侯洩尉、首揆文教、越明年政成、梓先生遺文四卷」といい、末尾で「邑子靳於中題」と署名している。及朴も序文の中で「不佞姑舍中郎、先梓尉繚子、阮嗣宗集。向不佞最嗜嗣宗『詠懷』詩、因取賦、論、雜文、購諸本參訂之、而必不可意訂者亦不尠、故嗣宗集又先梓」と記している。

従って、及朴校刊『阮嗣宗集』は、阮籍の出身地である尉氏に赴任した及朴が、地元の人々と協力して編集し刊行した本であると知られる。更に本文の巻頭題署には「裔孫阮漢聞較」とあることから、及朴、靳於中とともに、阮籍の子孫であるらしい阮漢聞という人物も校訂作業に関わっていたようである。

及本の冒頭には『晉書』阮籍傳、魏・嵇叔良「魏散騎常侍步兵校尉東平太守碑」、唐・李京「重建阮嗣宗廟碑」が収録されている。本文の構成は、巻一は賦六篇、巻二は五言詠懷詩八十二首、四言詠懷詩三首、巻三は論、

卷四は伝、牋、奏記、書となっている。

また、及本巻一に収録される賦の次序は薛本と同じであり、字句の異同や校字注も薛本と同じものが多い。一例を挙げると、「鳩賦」の本文は、范本は「遂捐棄而淪失」で終わっているが、薛本と及本は「遂捐棄乎倫夫。嗟薄賤之可悼、豈有忘於須臾」となっている。

及本巻二に収録される五言詠懷詩八十二首と四言詠懷詩三首は、完全に馮惟訥輯校『詩紀』からまるごと持ってきたものである。次序、本文、校字注、案語が『詩紀』と完全に一致する。従って、及本は、賦は薛本と同系統のテキストから、もしくは直接に薛本から採録し、詩はより完善な形で五言「詠懷」を収録し、更に四言「詠懷」三首をも収めている『詩紀』から採録したと考えられる。

一方、巻三と四に収められる論、伝、牋、奏記、書は、及本は范本と同じ作品を収録する。本文や校字注も范本と多く一致しており、明白な例としては、諸本で篇名と本文が大いに異なる「奏記太尉蔣濟」は、范本と篇名、本文ともにまったく同じである。

ただ、范本所収の阮籍の文章に付された評語や案語、たとえば范本「通易論」末にある「籍之通易、京房管輅有餘媿矣」といった類の語は一切みえない。更に、范本所収「樂論」で脱落していた文が及本にはきちんと載っている。よって、及本は范本の文章をつぶさに校勘して改訂したか、もしくは直接に范本から阮籍の文章を採録したのではなく、范本の底本と同系統の本から文章を抜き取ったとも考えられる。

また、及本には独自の校語や及朴自身による案語がある。たとえば巻一賦の巻末には「朴按、諸賦訛缺寔夥、謬有考訂亦十之二三耳。眞集久湮、昔人不過會粹成帙、故無善本可據。然其寄託之微、可以神遇。固無煩句安字妥輒以臆定也」と記されている。巻四「大人先生傳」の「反未央、延年壽、獨敖世」の下には「疑落三字一句、叶壽韻者」と小字注を挟んで、協韻の字を含む句があったはずであることを指摘している。

よって、及本は確かに切り貼りされてできあがった阮籍集ではあるが、賦や文章については、底本の本文の脱落や誤字を正して且つ疑問点を指摘

し、「詠懷」詩では当時において最も綿密かつ厳密に校訂された『詩紀』所収文を採用している。賦に関して、及本が薛本すなわち『六朝詩集』本『阮嗣宗集』所収の賦を選んだと思われるのは、范本、もしくは范本と同系統の底本の本文に誤字、脱字、脱句が多いことを嫌ったためであろう。しかし薛本は賦以外の文章を収録していないために、文章はやむを得ず范本系統の底本から採録したのではないかと思われる。

以上のことから、及本は底本として依拠するに足る版本を吟味し、また本文をきちんと校訂していたことが分かるのである。

五．七十二家集本『阮步兵集』と百三家集本『阮步兵集』

明末の天啓崇禎年間（1621 ～ 44）、張變が漢魏六朝人の詩文集の叢集である『七十二家集』を編集刊刻した。その中に『阮步兵集』五卷附録一卷が収められている。

七十二家集本が収録する作品は、詩のほうは他本と変わりが無い。四言「詠懷」三首と五言「詠懷」八十二首であるが、ただ「大人先生傳」にみえる「采薪者歌」と「大人先生歌」二首は掲載していない。

「詠懷八十二首」の題下注には「馮惟訥曰」として馮惟訥の「阮嗣宗集、傳之既久、頗存僞闕」云々の案語を載せている。四言詠懷と五言詠懷の本文と夾注は『詩紀』所収文とほぼ一致し、『詩紀』を敷き写しにしていることが分かる。ただ、本文中の夾注では『詩紀』や馮惟訥の名は出していない。

一方、文章のほうには他本にない作品が載っている。たとえば、「辭蔣太尉辟命奏記」の次に「又」と題して「違由鄙鈍～惟蒙放許」文を掲載し、他にも「與晉王薦盧播書」、「伏羲與阮籍書」、「通老論」佚文二条（「聖人於天人之理～保性命之和」、「道者法自然而爲化～老子謂之道」）、「老子贊」佚文、「孔子誅」佚文、「搏赤猿帖」、「弔□（一字空格）公文」佚文を掲載している。

ただ、詩を『詩紀』から採録したように、文章も明梅鼎祚輯纂『三國文紀』から採録したのではないかと思われる。七十二家集本にあって他の阮

籍集にはない一連の文章は、『三國文紀』にすべてが掲載されているからである。

また、『文選』で「詣蔣公」、范本、及本で「奏記太尉蔣濟」と題されていた「辭蔣太尉辟命奏記」の本文は諸本の間で字句の異同が甚だしいが、七十二家集本は『三國文紀』所収文と本文が同じである。

更に、七十二家集本が「辭蔣太尉辟命奏記」の後ろに収録した「又」と題される「違由鄙鈍〜惟蒙放許」文についてであるが、同じ文章を収録している『三國文紀』で、梅鼎祚は「此篇無題、近刻阮集不載、據余家藏抄本」という題下注を付しており、この文が当時はたやすく見つかるものではなかったことが分かる。

張燮が自力で収集したのは、附録一卷に収められる諸々の文章であろう。張燮は『晉書』阮籍傳、晉嵇²⁴「魏散騎常侍步兵校尉東平太守阮公碑」、晉虞播「阮籍銘」、梁沈約「七賢論」、張燮「竹林七賢贊」、宋顔延之「五君詠」より「阮步兵」、唐包融「阮公嘯臺」、賈島「阮籍嘯臺」、宋蘇軾「阮籍嘯臺」を一挙に掲載する。

そして「遺事」と題して、『魏氏春秋』、『世説新語』、『語林』、『水經注』から阮籍に関する記事を集め、更に「集評」と題して、顧愷之「晉文章記」、『詩品』、『文心雕龍』、『文選』李善注、『竹林詩評』、『詩譜』、『滄浪詩話』所載の阮籍評を載せている。

この張燮の『七十二家集』を基に、更に三十人余の漢魏六朝人の詩文集を加えて明末に編集刊刻されたのが、張溥の『漢魏六朝百三名家集』である。『七十二家集』の『阮步兵集』五卷附録一卷は、『百三名家集』では『阮步兵集』一卷にまとめられた。

張燮の『七十二家集』と張溥の『漢魏六朝百三名家集』は毎半葉の行数と字数が同じであり、一見すると『七十二家集』をそのまま翻刻したようにみえる。実際、『阮步兵集』については、張溥は七十二家集本をほとんど敷き写しにしたことは明白である。収録作品、本文ともにほとんど違いない。

但し、張溥は七十二家集本に対して、収録作品の次序の変更、増補、削

除、新たな注記の補足などの改訂作業を行なった。作品の次序は賦、牋、奏記、書、論、傳、贊、誄、文、帖、詩となった。七十二家集本が収録した「通老論」には新たに佚文一条（「三皇依道～薄厚之降也」）が加えられ、七十二家集本では削除された「采薪者歌」と「大人先生歌」二首が再び収録された。

七十二家集本が「答伏羲書」の後ろに附していた伏羲「與阮籍書」は削除された。およそ『百三名家集』所収の詩文集では、その人物の詩文集の底本に収録されていた他人の作品はみな削除されている。七十二家集本の附録一卷に収録されていた諸文に至っては、『晉書』阮籍傳だけを残して、あとはすべて削除された。

もっとも、張溥は張燮が収集した附録の文章の一部を夾注の形で生かした。「詩」の題下注で、張溥は『詩品』、『詩譜』、『竹林詩評』、『滄浪詩話』の阮籍の詩を評した文に加えて、『藝苑卮言』の阮籍評を掲載している。

更に、張溥は独自に注を施した。そのほとんどは諸書からの引用文である。「詠懷八十二首」の題下注では『文選』李善注所引顔延年「詠懷」詩注と馮惟訥『詩紀』の案語を引用し、一部の詩の本文末に明楊慎『丹鉛餘錄』、『詩紀』の案語を、楊慎『詩話補遺』、『世說新語』などから、詩の内容や本文の正誤に関する注を加えている。

ちなみに、底本である七十二家集本は『詩紀』を丸移しにしており、文中の校字注もほぼそのままの形で取り入れているが、若干の取りこぼしがある。百三家集本は夾注の形ではなく、本文の末尾に一括して『詩紀』の校字注を置いている。七十二家集本が取りこぼした校字注もきちんと拾っており、張溥が『詩紀』をあらためて確認したことが知られる。

六. 四言『詠懷』十三首と「潘璫本阮籍集」

1983年に中華書局より発行された逯欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』は、馮惟訥の『詩紀』を底本とし、且つ諸書を参照して編集されたものである²⁵。その「引用書目」を見ると、阮籍の集では「潘璫刻本」の『阮步兵集』と『二十一家集』本『阮嗣宗集』（汪本）が記載されている。

『先秦漢魏晉南北朝詩』魏詩卷十には、阮籍の四言詠懷詩十三首、五言詠懷詩八十二首、更に「歌二首」として、「采薪者歌」、「大人先生歌」、「又大人先生歌」が収録されている。うち「又大人先生歌」は『初學記』から採録したものである。他はすべて「本集」から収録したという。

遼欽立が拠ったという二十二家集本『阮嗣宗集』は確かに上下二巻からなるが、四言詠懷詩の第四首から第十三首までは収録されていない。よって、四言詠懷詩十三首の出処は「潘璉刻本」の『阮步兵集』であるということになる。ところが、遼欽立は「潘璉刻本」の『阮步兵集』を直に見たわけではないらしい。

「詠懷詩十三首」の題下注には「黃節曰、阮步兵詠懷詩五言八十二首、余已爲之注。其四言詠懷詩十三首、據近人丁福保所編『全三國詩』云、按『讀書敏求記』謂²⁶、阮嗣宗詠懷詩行世本、惟五言詩八十首。朱子儋取家藏舊本刊於存餘堂、多四言詠懷十三首云云。余歷訪海上藏書家、都無朱子儋本。今所存四言詩僅三首耳。據丁氏之言、則僅存『天地』、『月明』、『清風』三首。余亦未見朱子儋本。惟舊藏潘璉本、乃明崇禎間翻刻嘉靖刊者、有嘉靖癸卯陳德文序、有崇禎手丁丑潘璉序、分上下兩卷。四言詩十三首、其一至三與丁氏刻同。其四至十三、則丁氏所未見者。意與朱子儋本必無大異。或且潘本在朱本之前也。因並取而注釋之。注有見於五言詩內者不重出。遼案、潘本、朱本阮集今皆不易見、即用黃氏所校潘本比勘之」という。

つまり遼欽立が拠ったのは潘璉本そのものではなく、あくまで黄節の校勘を経た潘璉本の本文を正文化したものであったらしい。ところが、黄節校注四言詠懷詩十三首は目にすることが難しくなっている。筆者は今のところ、黄節校注四言詠懷詩十三首の原書を見つけられないでいる。

遼欽立が引用した黄節の言によれば、潘璉本阮籍集は、嘉靖癸卯（1543年）付けの陳德文の序文と崇禎丁丑（1637年）の潘璉の序文があり、范本の翻刻であって、巻上下の二巻からなるらしい。確かに巻数は范本と一致する。だが、潘璉本が范本の翻刻であるというのは解せない。

まず、潘璉本が翻刻したという范本の五言詠懷詩には「青鳥海上遊」詩

が収録されていたはずである。しかし『先秦漢魏晉南北朝詩』にはこの詩についての注記がない（更にいえば、遼欽立は范本の翻刻本で「青鳥海上遊」詩を収録している汪本も参照したはずなのだが）。

次に、范本の四言詠懷詩は「天地」と「月明」の二首しか収録しておらず、しかもともに類書から補充した佚句に過ぎないはずである。范本を翻刻した二十一家集本（汪本）も、『詩紀』所載の「天地」、「月明」、「清風」三首を採用して差し替えただけであると思われる。

潘璫が范本に四言詠懷詩十三首を増補して翻刻したとも考えられるが、そうだとすると、潘璫はどこから四言詠懷詩十三首の本文を入手したのか。これは大きな疑問であり、また謎である。

傅增湘『藏園羣書經眼録』卷十二集部一には「阮嗣宗集二卷」が著録されており、傅增湘は「明崇禎刊本、九行十八字。有潘璫序。題阮陶合刻、實即張燮刊本」と記している。「實即張燮刊本」というのは、傅增湘の誤解であろう。張燮輯『七十二家集』本『阮步兵集』は本集五卷と附録一卷からなり、傅增湘の記録する「阮嗣宗集二卷」とは巻数が一致しない。

『中國古籍善本書目』²⁷ 卷二十八集部總集類によれば、『阮陶合集』十一卷という書があり、内訳は『阮嗣宗集』二卷、『陶靖節集』八卷、それに『東坡和陶集』一卷が付されているらしい。傅增湘のいう『阮陶合刻』とはこの『阮陶合集』だと思われる。しかし、『阮陶合集』を所蔵している機関は少なく、しかもほとんどが残本のようなものである。

遼欽立が詠懷詩の各首下に記した出処をみると、四言詠懷詩は第一首「天地」と第二首「月明」が「本集下」、第三首「清風」から第十三首「晨風」までが「本集上」、五言詠懷詩は八十二首すべてが「本集下」となっている。これからみると、潘璫本の巻上には四言詠懷詩十一首が、巻下には四言詠懷詩二首（これは奇妙な収録の仕方である）と五言詠懷詩八十二首が収められていたと推測される。潘璫本が范本の翻刻であるなら、巻上には賦と文章も収録されていたはずだが、これはまったく確かめようがない。

四言十三首を収めているという潘璫本は、南宋の陳振孫撰『直齋書錄解

題』に著録されている、四言十三首と五言八十首の「詠懷」詩を収めるという「阮步兵集四卷」が、明代に伝存していた可能性を示唆する点でも重要な版本である。しかし、筆者は潘璵本の原本をまだ目にできておらず、潘璵本がいったいどの系統に属する版本であるのか、また明末に四言詠懷詩十首がいきなり現れた詳しい経緯については、後の課題とするよりほかない。

以上に述べた八種の阮籍集には異字異文が多く、またそれぞれに特徴があるものの、しかし基本的には直接的にであれ、また間接的にであれ、同系統のテキストを底本としていて、その収録する作品は重複する場合がほとんどであった。更に、どの阮籍集も元をたどれば、結局は同じ祖本に行き着くのではないと思われる。

それを窺わせるのが、どの阮籍集でも同じ箇所の子句が欠損していることである。「清思賦」²⁸、「獼猴賦」²⁹、「樂論」³⁰、五言「詠懷」の「十日出陽谷」詩³¹、また「驚風振四野」詩³²でこのような現象がみられる。

また、どの本にも同じ夾注がある例が一つだけ存在する。五言「詠懷」「昔有神仙士」詩「嘘噏嘖瓊華」句の「嘖」下には、どの本にも「音機、小食（倉）也」という注がある。以上の共通点は、現存するすべての阮籍集の祖本が同一であった可能性を示している。

南宋まではおそらく完善な形で伝存していた阮籍集は、明までの間に散佚した。阮籍の作品で現代に伝わったのは、阮籍の伝記にその名がみえる作品、『文選』に収録されている作品、多くの後人が言及して高く評価している作品だけであった。後人の評価に沿うかのように残った阮籍の作品を、更に後世の人々は刊刻し、ある者は史書、阮籍の伝記、後人たちの評語と作品を照合して新たな注や案語や評語を付けた。

完善な阮籍集がもし伝存していたなら、阮籍の作品や、更には阮籍という人物について、より多くのことを知ることができたのかもしれない。しかし現実には、後人が評価した阮籍の作品のみが、更にそのまた後人たちによる再度の評価を得て伝えられていったのである。これは阮籍の詩文が

後世に伝わっていく過程において、非人為的で自然的な要素ばかりではなく、人為的で意図的な作品の取捨選択が行われたことを表しているといえるだろう。

〔注〕

- 1 中華書局標點本『三國志』。
- 2 拙論「東晋時代の史書における阮籍評価の相違」（『藝文研究』第六十八号）参照。
- 3 清嘉慶十四年重刻宋淳熙本影印、臺灣藝文印書館刊、以下同じ。
- 4 『詩品』上、『文心雕龍』卷六・明詩、卷二十七・體性、卷四十七・才略。
- 5 『唐會要』卷六十三・史館上篇・修前代史参照。
- 6 中華書局標點本『隋書』。
- 7 『日本書目大成』所収明治年間寫本影印、汲古書院刊。
- 8 中華書局標點本『舊唐書』。
- 9 中華書局標點本『新唐書』。
- 10 許逸民・常振國編『歷代書目叢刊』所収輯佚本卷五別集類一、北京現代出版社刊。
- 11 孫猛校證本、上海古籍出版社刊。
- 12 上海古籍出版社刊、以下同じ。
- 13 拙論「關於宋刊本『謝宣城詩集』和古謝朓集」（『古籍研究』一九九九年第四期所収）参照。
- 14 『西諦書跋』（文物出版社刊）卷四集部總集類に同文が収録される。以下同じ。
- 15 拙論「『謝朓集』版本淵源述」（『古籍整理研究學刊』2000年第1期）参照。
- 16 薛本と范本が「人言願延年、延年欲焉之。黃鵠呼子安、千秋未可期。潛見安能處、山巖在一時。置此明朝事、日夕將見欺（范本作期）。（小字注）一本第五句云、獨山崑中■（一字墨格）、惻愴懷所思。王子一何好、猗靡相携持。悅懌猶今辰、計校在一時。置此明朝事、日夕將見欺」とするのに対して、『詩紀』は「人言願延年、延年欲焉之。黃鵠呼子安、千秋未可期。獨坐山崑中、惻愴懷所思。王子一何好、猗靡相携持。悅懌猶今辰、計校在一時。置此明朝事、日夕將見欺。（小字注）今本作潛見安能處、山巖在一時。置此明朝事、日夕將見欺」としている。

- 17 薛本は「扶搖安可翔」句と「不若棲樹枝」句の間に五字分の墨格があり、范本は同じ箇所「翔羽雲霄飛」句が入っている。
- 18 現存する『初學記』（清古香齋袖珍本排印、中華書局刊）には阮籍の四言詩はみえない。一方、范本が増補する四言「詠懷」二首は『藝文類聚』卷二十六所引阮籍「詠懷」二首と完全に一致する。范本あるいは范本の底本は、『初學記』と『藝文類聚』とを取り違えたものと思われる。
- 19 第一冊『董仲舒集』冒頭に焦竑による萬曆癸未（1583 年）春仲三日付けの「漢魏諸名家集序」がある。内閣文庫 359-0030、國家圖書館 14112（南城翁少麓刊本）。
- 20 萃慶堂余氏刊本、内閣文庫 359-0031。
- 21 金閭世裕堂刊本、内閣文庫 359-0032。
- 22 國家圖書館 259。
- 23 陳伯君『阮籍集校注』（中華書局刊）序。
- 24 張燮は本文末に「『廣文選』載此碑爲嵇叔夜作。按、叔夜先嗣宗死、安得嗣宗沒後爲作碑？楊用脩以爲嵇叔良作、蓋叔良爲東平守云。然碑之言曰『臨濠濮而存惠子之問、運斧斲而思郢人之斤』、則又似交友契洽者、不宜出後人手。姑闕其名以俟博雅者定焉」と注記している。
- 25 『先秦漢魏晉南北朝詩』凡例参照。
- 26 錢曾『讀書敏求記』卷四・集・詩集。
- 27 上海古籍出版社刊。
- 28 「清思賦」の「振咸池於南□之岡」句。
- 29 「獼猴賦」の「楊震聲而□皮」句、また「既□□□東避兮」句。
- 30 「樂論」の「采大林之□當時之所不見」句。
- 31 「十日出陽谷」詩の「遊沒河行□、□者豈長生」句、「一餐□□□」句、また「哀情□能止」句。
- 32 「驚風振四野」詩の「世有□□隕」句。